



四山藁

二

^ 5  
1183  
2 止







四山藁第二

隨齋夏成美著

豐蔦久城

同

宋津包徳

齋藤包昌

夏目包壽

校

俳諧小言 十則

俳諧をみるもはきくもこれに付きて思ひを述る戯を  
抄れ、中に中昔までいふ程言ふ乃至いふ来れ歌を  
らう紀昔もせ銭翁よりけりめて詩歌の情をうけし風雅の  
心を俗俤よりさうふにありよ多うたれとて詩経万葉木乃



古体は似たりしはれを此蕉翁の門弟子おのうま  
ゆるりあつて道のちまにわられ糸乃いほくにみれ  
たむやうよひまをゆけを世のま急くよなりていそ降乃  
ゆるりあつてのほまひういせおのくまのくに蕉翁乃  
一体といふ角く實に蕉翁をそせりまれといふ一  
是をたしと眼なき人の象といふ獸の尾をまて足をはりて  
漆桶は似たり筈乃やうあるといふむらさくその象にあは  
るといふ一ねるも眼乃人のほちの象をまてりよら大に  
ふふ一扱蕉翁の風雅といふにまをりよにかの詩経万葉  
なまのそり船き草木魚鳥におほをれおもひをませりやうに

風雅の心相よはつておのほくしり出せるあはれ人乃耳を  
驚くかく百年乃今もめて奥まるといふ一は邪なき風雅の  
心乃根本に土くひあせりやゆきよといひ出せるあはれ人乃  
くよめはくしりあはれ自然乃姿をま侍りたり  
その詞や出りに趣ありたへと新奇乃まを豪邁の詞を  
ほけぬるもそのも乃趣向はくま俗意よりけりみ出せし  
外をうまて内に実貯くおろりて足ゆり此原ありたへい  
俗語鄙言あるもまの風雅の心よりなりおほし人の心にも  
徹底して鬼神をほくむへも此系なりはれを古体し  
いひ近侍といへるもいさし詞のまはりて風雅の趣を



けしにわさうめある處くすた蕉翁一世乃化意を盪せ  
しておのましく醜を可く作しおのけく向上の一路をも  
企至る處に蕉翁いひいへる事なり古人乃求をうたを  
まゝめり古人乃求る所をもめを南山大師乃筆道を  
けしへる詞をもて門人よふされる世心をよくおもへを  
けしに末師を捨て多らに蕉翁の心を削り形を破て求る  
所を求るそのましくおもひを涼めて古き句をもんがけく  
けしを交句あまに心をもちいりけしに神ありて是を通り  
處れまけり

句をけしに至りてまひて雅を求へすけしめて俗を去る

あり俗ある心まゝ茶に去捨けしと雅のわのけしめてあ  
らうく雅けし趣めけしき詞を求るゆゑにその求る所に  
つきても俗意の出るを句にまゝにいふはけしとま  
なほまゝかくらふまゝまゝの拙いおほひの意の俗を  
あつたまゝまゝとて句を棄るすおほまゝにまゝといふ  
けしわをけしとまゝとてみまゝにけしとてけしとて  
再ふてまゝとて

句をけしに心けしとての句乃心雅ありや俗けしとて心を  
せめて詞乃工拙の二等ありとてまゝとて詞をめてまゝとて  
俗意ありとて取へるはけしとてまゝとて詞卑き



あつてもあつて嬌ふ屋し人乃句を足る事かくはくして  
おのまつく向をみむはくくかまはくくたる屋し  
文章ハ實をさむ奇言怪語をけをぬるも文章一篇乃實をい  
木偶人乃めてくかまをさめてまじつ六や一發句乃さくを  
かき亦あつたり世にその中にあつ葉書するやうをさるに大やう  
哥物さる乃ほるさるめをさるくぬるもや乃発句ハ鄙  
言乃俤形さるかけあつ狐乃表に貂をばさ合せさむ  
あつ古らと俳諧文章乃筆格さる蕉翁に至りて始て  
世の趣をりさるその趣といふ何れや詩歌文章乃實をさる  
なるとして俤語鄙言をさるさるの文さるの文さる

心好あつるさる俗りおち入むるをさる屋しさる  
文章乃さるかきさる俳諧の工夫さる去俗乃二字さるあり  
俳諧をさる修身齊家乃道りあて或る老佛の心さる  
さるめてさる妙に説をさるもさるさるぬる世の道をさる  
せんやして却てさる人乃識をさる俳諧はさるさる乃  
あつさる佛語聖言りさるさる俗中乃風雅を述る物  
さるさる別に趣ハあつさるなり世の趣といふも世をさるさる  
さるをさるさる人情乃さるさるを物さるさるへさるにたるへて  
み七乃あつ葉にさるさるさるさるさるさるさるさる  
くても戯言をさるさるさるさるさるさるさるさるさる



屋々れや小道とくへやも親の屋交る何事まて吾下の屋く  
なりあもも侍り侍り

子尔乎彼いまで自得まへ一ぢぢ係屋らむと誰もお解え  
申る事あて替れ侍て乃物あへ侍るふ工夫いつ屋ううに  
鬼神を流しむるもあへてをその事あれとお解るうにひ  
侍あへてもまた乃感の侍むお解るその國を子尔波  
をも多侍り侍るひあまの傳受は決ふうにあて子尔波に  
あまうう侍るむ物あまのあまの常流平活中いへとも  
いと川乃てまてあまのいぬれを替の趣乃きあえ侍るあてもあま  
屋一侍る中に詞を世をもと變するも侍るまを子尔葉と

いへとも詞をあまのいへて今古は侍る乃あまのいぬれも巧新屋一  
萬葉古今乃哥乃中の海の世もあまのいぬれもあまのいぬれも  
侍るあまのいぬれもあまのいぬれもあまのいぬれも  
波中いへともあまのいぬれも

附句ハ前より此素やう句毎乃轉變のひてつくとあまのいぬれも  
りれやも一つ此理をうに去捨侍るは無礙自在なる屋一  
理をはあまのいぬれもあまのいぬれもあまのいぬれも  
う侍るうてあまのいぬれもあまのいぬれもあまのいぬれも  
りあまのいぬれもあまのいぬれもあまのいぬれも  
事乃あまのいぬれもあまのいぬれもあまのいぬれも



多岐理論より蕉翁のふりてさうさう交われば後世に  
七名八体二十四体ありともそのふ初心のみちいさくして  
僧家より名目部乃り少すも眼乃り交うる考を論  
す所よりあるさうさうなりは諸家の教方の俗をもて句を  
求め句をほくむとせとてへとつとて大なる妨をあれ  
ば原一其のゆゑを風雅乃心のまじり理のなかり物あるを  
也理乃りあるわさを理をもてたさん中まらるゆゑに水虫  
上り胡蘆子をほめたるはむとてはひよひよりこれ原より  
はらひむとて理乃りといふもさうとて所謂あり一向に理を放  
下せしむるは理にあら入理を縛せられぬやうに

おりの原支のりはまの附所を定めは物物をあつてを  
して付付むと甚無下乃事おてあつてを編序題をもて  
言をたて或は起承轉合ありて又天地人乃三才となす  
あつてむのみをく無用乃辨にして附句の害あるを甚  
きハ形

去嫌を變化乃大体をあらへしむとて連哥式目乃古  
法を始として御傘嚏草ホ乃諸書其のひひひひくはま  
ひひひひにあらむとて乃ほひひひひひひひひひひひ  
凡變化の道理をさへわきまへはるん文字よりはにほ  
原よりすの一句乃轉變をよりく心よりあら案よりあり



第一八句乃好悪うしてけり合と第二の論ありべし古入變  
化のまゝぬにまうけり法則ありをそ書彼書の空論をもて  
實地の附句を繋縛しつへりて變化乃趣を居る學者  
あふ心をぬて變化乃事をもてあすれ侍るは一坐の争論ハ  
居みぬし一本より諸書乃そあひ詞の教くいつあり強記乃  
人形もやも一記臆せむるもつて詞ハ無盡の物あれを  
諸書の法則もその大綱をあけり物たりしはとて  
みるに古法を度く居きりつて  
會席乃ありし備いにも風流ありしは花紅葉の造ひ  
けりえありしは西行法師の扇文臺ふりてをう同調の

友三五人花晨月夕におよひをのこすひうあひよはきて情を  
ゆりていとめてさきむらへり懐紙の法堅懐紙横くさる  
し乃ささちりる法あれと今世の緘る物にさるあふし  
句讀のあやう人すめてさきむら聲乃言低りあやさる  
をうつて東坡居士三分ハ詩七分ハ是讀ありといひよ  
思ひつるあはほし

世人の褒貶けり多のむ居り下里巴人の和する者おけり  
曲るれを和するものいとくすくおきりさる今世の人乃  
きをよろあひてわの心にあもぬ詞をもはけ侍りハあれ  
世に居りし鳴呼の老より居り知音の人ひしとあふりて















佛性の有無有りりればはるるく有りてはるるも有りてはるる  
ゆふもあはれなるすはるるの風雅の一佛性をまをれまゝしてはるるの礼  
乃春ふる夢路ひはるるの實乃秋ふる船のく有りてはるる  
のふすもれはるるといふはるる古人云唯阿甚相遠くはるるとのひを  
あはるるの心をもとあはるる序の心をもとす

野狐録序

ひまもす茶をすすを烟をすひて撃たすもすはるるひくひぬ乃  
まゝくくをの目をとらるるはるる既六万八千日雪もはるる  
らりる木のそはるるのみあはるるをあはるるはるるわあはるるらり  
ふりはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

俳諧のきりけりあはるるひておもひをなすはるる此あはるる年ひさ  
しはるるはるるはるる上子も至るるはるるはるる一大虚をなして  
困く乃作者よりと文音志はるるはるるはるる句を求め洋をこふ  
今もはるるはるるはるるはるる中く人めりはるるはるるはるるはるる  
あはるるひて書もはるるはるるはるるはるる三文字のひもはるるはるる  
なはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
おはるるはるる一定不定とおもひはるるはるる不定あはるるはるるはるる  
あはるるはるるへてあはるるはるるをひはるるはるるはるるはるるはるる  
ひそ一精語をひはるるはるる五百生野狐身を満ぬるはるるはるる  
あはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる







くらうて三百余程のさしおろしもさすにうねるおねさうは  
らふ方おほく賡句といふ事ありて申きて世に戸に三旬あ  
らうる日数をゆて今頃は故園に帰らむとすみちのゆく  
てにいつくせし巻く韻はみちぬもさねも野分のすくね  
みちもさすくく河の砂をさるにさるみて書はね  
つゝあのおひけり多きす糸くをゆて人なりてはくむあを  
こひねふさうたす心のあまらるにすくゆにれ羅城門は  
すくくといふ鬼あまの氷消さるくあはれさ葉をさへむ  
ものさすお時あかしくと心くはあ物のけさにおよふ事  
けくこといふさうさて友人夏成美多田の森蔭のゆふ月

夜下草を採

金翠句帳序

忘年の友硯亭はねに來りて閑を多きくうていふ風情を  
もさすに胸中さうくく一草のたぐさへあはれく句を  
はさるたうさくくわさくくは俳諧は無念慈を  
さくす後中万巻の書けりともいふいふ文片に抄のらう  
ら残りしは抄のけり一家乃工夫ありてせん念くく一有を  
さく一有ありてあまの見るおまわりのさくその  
物さうらに心乃師とけりてあまのあまにお情をうつたをさ  
一紙小画くくわらうら一草をおくくさめて抄のさち







ありのこころを向うつをいふ古人のつらさあると文臺をお訪せ  
ふふけうこ也やけふも先達乃のひすを書すたふらやあ  
たをあひうちすれうへて人をも足あまるといふはうつ  
しややうれせう白片の楮先生

贈短冊掛辞 以住吉松樹製

姫松乃多んくく多人乃もせよとおをうく城日あろとて  
つとひらふうた向もいひ出ねいけはくものうになを  
しを吹石主人はあうすまはまの紫乃あま屋におひ  
めくくし合抱のゆくおはまぬも他まもえまはくま

賀不老庵落成辞

不老庵地をくおふりくといさやすんでの人いすはま  
所のはれまうたあひおにまおあうりつきてま  
はくくあまをわくよまをうけりあれまお中  
物にほくまもまもあまひくあのみひや冬乃  
日くまうた方をまつて買日乃たのみ小春をまこひ  
市まら乃りうまはひけくうはまにひより此庵乃  
のくたあ地すくあひの心操まうまうまうあま

若季作の門はまつてま松乃う漆

示若輩辞

年乃けらにもあまぬものまもらうて月あみ乃俳諧















いひて又いぢつをくへけり年也

寄相撲題言

其の声をきくはとれおもてをえねも心片におあ一人は  
はひにゆりくをとおほゆき傾蓋かゝるふぢこいふと  
けふ事ふやつあゝあとの聲をきくそのおりてをくは  
こもはつふ乃小松ひくくをくはておのあら葉のちりくま  
ふ交りけりすて此因のけひひくははをくはまたひり  
手ひをくはみ作意のけりてあゝをよほけにかのく  
心路誰此まに工夫はくくれは場のふく葉ちり  
けりあゝあひひらて其聲をきくそのおりてをくはあゝあ

せむやく壇光といふ法師乃言雄の文覚名をあらもみ  
おんてはやくとれぬにみち乃ゆけにあひてを屋川をきあま  
法師あらめとおあてにゆたよるてなまやのふ事も  
けりや小首かたてあまふてその後得意乃ちりて  
ふくけり乃あまの世捨人のくくハ奥うみ所けあま  
ひやすちにすさぬるまなまもくふたをひあまぬ屋  
あひく書状よひあゝぬの句やも乃あけにきくえこぬ  
屋うにけりゆくをくはふれふあぬおをま作者と  
おまひぢやゝぬあゝもあまひやこひとすけり庵も  
あら入るふくけり状あをせり合点をもあひゆとるけめ



竹もたふれとひひくぬる時たまにうきうきや  
ありひて多にそのお恵をきく其のおりてをるるん境と  
すふふを物に書付て徳智古乃まうにせむとおふにせ小  
ある天狗形とくふもけか乃壇光、すうに竹うていさ  
一番あといひめやせん中ひとれう呂

梅園記

梅をおほくうきく梅園といふ所ら松をうけりて松亭と  
号け拍りうきく拍菴かといふはふやうせううきくひ  
すもりうきく傍り寺らと安樂寺やいふ彼はうきく此み  
ら乃名を其のゆにうきくふう記ゆきあひゆき

その南に菅神乃み屋、後らきとつつきはつふ事つ川乃  
やううきくうきくあうきくもやうり此宮居り文雅の冥  
意をいひて渴仰乃あまうきく河愛樹の一りや城極そめ  
てより根をひあま枝片うへ年うきくに芽をわらわらふと  
うきくへあうきくは、大うきく花の品類を法くせうきく直脚ハ  
野梅枝すくけく座論ハ花おほくうきくあらあうきく緑萼ハ白  
ふやうきくに豊後といふよハ其の實をえてを屋せうきくハ翔り  
うきくけうきくハ寒紅梅乃あまひあうきく鵝梅といふハ花おほ  
あに消梅ハけく屋にけくをいふあま龍乃あまうきく即ち  
この雲けうきくひうきくまけもの其の外ひとふ屋へり







是わらうらむひうらむる所不ハ何ハ以はつら以はつら以はつら  
ありてわら景菴にむく一修其れはつら此室乃何ハ満一筆  
坐して酔の中に園一はりぬ是を壁にまをたきて四此  
人のせらにふひ一一雪乃舟あはれも出へくおぼ由家附るの  
園又ひういて落く冥く少光の中にその何をひをせもにせ堂  
ををわらふわき夢寐に園中乃おもむきをわすまは  
ある一一わら贅亭をおもひや以あやましく乃使りたあやを  
書ておくらふとわら千里に一枝のまををよせし心もく也  
是を記す

題龍几句帖

尾をもち雀よりぬ多うて親又はをあをさす一一てうち  
あつたをここの子をもちすまはうわらぬまらあけつあは  
この祿をわらくすた心と何やまらぬ字中を俳諧乃句帖く  
るもおぼろしくわらもあつたる世人の褒貶乃とおろしく一一て以  
ゆれを神性中一一ひはあをわらうてそれ的よりひ何れ親  
るうくわら一一あつた念怒と一氣のうら親かておのつう  
天地乃運動まあつた一萬象のすう一一にひひうあつたを  
めて一一あつた多様片まは諸方の好士うら金音玉聲を  
を一一あつた一一此帖より一句一章をよめか一一ぬう一一ん  
うた雀よりぬ多うて尾のあつた一一あつた一一起をあひね



くもれ也

素卿自句合序

つはあま乃はのうへにぬる所の玉をあそびひいハ名  
利をひきひ家あそびぬる一あにひやうけつそひあり  
同類乃句を蠻觸なりやわあそびあそびにうらまをあそ  
わきそひあそび他者ひいとそぬきそひもとらぬこも  
ちけもそぬは甲乙中もに一時乃わあひいとぬき乃也と  
おひふにまうー西行上人のみもすそ河なり後成卿のあ  
そぬとらぬそぬはけううのちわあすめあ勝鹿なり在ー  
素堂老人それよりひて自句合序判のこゝあもやうと

みつり書ぬときを先縦とておひひとあそびやけりハ  
判者もみつりぬるぬるをきぬるをさえてあそ  
ゆつりぬるは素老人すみーけりーれ名をまうー  
そぬあへー中あそぬに興して心のおよふあそをさふす  
おひよと素卿の句を他家きく名利乃間をはあそと  
けぬとのけ乃めうらあぬ是非心けりあそあそ古代に  
して意匠世ふあそはけりけりわあけりあそ心けり是非  
せむすあそはけりけりあそにあけりけり乃人判乃あそを  
あそけりけりいそあそ迷中の是非ハ是非俱に非也や

題空則是諧後



















尊像ハ侍々たるやとれしのたふひ行ねとむの  
好士の満々たるや能句ひと行書しあむ共たの  
侍々あやし記もれを清まもの所とらけき物あり  
りもれる物ありたのく移賜乃をまなくまてあひひ  
はくハ面をあふすふん能やせむ片ハ風土の物と書も  
此一帖下をよめ入て常にくして帳中の秘とせむといふ  
是一步をすめ候して名所を志ふやいへ新ふ記語を  
りやと彼鬼貫の禁足紀行乃たらひあもよとくは  
いとそれとる海片乃より記を大なりと給ふはたは  
はめて多田老樵復成美誌之あかりこふくもは

めくつふりハ行れ

月川上人追善集序

應塘里需

法を觀す事正しく中も心に着すよハ邪におあきり  
止觀乃文を心とて世よりまきよふ法師ありりすて  
佛像經卷よとけりめて湛汰瓶ひやつも身不とく新中の  
物て今の世とありと記はまとの世捨人なりりふは子に西  
行乃抖擻をこくひ芭蕉の漂泊をくをみは西より東に  
杖をくふは手、何れ著飾しよ所り縦横九尺の庇を  
あれてとくくすめ事もりき讀經礼佛のほりよハ狂  
句をよのみて是をもて身のつれ所よせんるとりたれ



其由とふ別号を人のきくはいつるまにらまるとやひよふ事の  
うふけりて居て其由乃名紙捨て月川とよるれりるま  
檀室ももまふのむ捨ていれうらうら乃庵乃名紙と  
すてに世を捨て名紙すて風雲にまるとある中いはは  
るを啼くまらむるまらもかかたまてとやうに此園乃海  
居まらみまひいおほむ神乃まての宮とのあまひい  
多賀大社よりほうへてこれ社造営の事あり執おこま  
くれりる見もかまて心乃冥意にうらふらぬる居りれと  
みつるもやまひきうくかまれくてはひに寛政庚申  
四月廿日大下からまて休せまらひいりまれとみとん家き

物れらまはとてこのい推し狂句若干をらふらり求て  
何方にわくらうせんといふに園人塘里等々らふらら乃心ゆ  
りまわまてまら上人乃久し知知音とてうらまらるもいほ  
れら居り因縁ゆらねいふて書とてまらまら懐舊の  
まらまら残拂てまらをまらす此集やらふらと上人のまら  
まらあはら居り

題 祇徳法師句雙紙

ゆふ原の山にまけりて杜宇乃啼るるま有明月り  
馬嘶て雲雀のまららるあはら原の原けは甲う花舟のわ  
まらのあまらてまらにらまらうけり益の居すまの松の葉蔭ま



薰風を懐くして志をねじりて夜の風の中をゆく  
此も多し日々の轉變旅あそびをれりてをうらむ俳諧の  
連句あとしふもわづかにかきとゆく新しきもくせあは  
わききすへて世中にたちめく終ふ人のすきみも帆あけ  
船の尾に多しすれおる月日一日の旅なるとして  
まゝ何とやけさハ翁もいふる所り世を旅り代々小田  
乃と多しはといく東海道の一すちもあはぬ人の風雅に  
おほつるわづかに

吟社懐舊録跋

人乃心のたすくはるありて乃あはくせりやわきにいとく

人いふるまじくもさあえ多しはまことたのつるまれども  
心あきき友のあつてやはる人のあかひりあらしめてさる  
形家へりわづ蓬窓りあつて月をたよひの淋しき折  
くむりよと名あふ人く乃わづあつて年月は  
読書よつてはる人あつてけりあつてはるわすまると  
率のまじりにあつてはる物あつてはる蒲生の中塾生あつ  
てはる彼人乃伯父吾扇老人た乃あつてあつ  
めて仮小懐旧録と名はめて平等回向の念佛朝あつ  
はるあつて老人あつてはる後世の志乃むなしく  
あつて人も念あつてはる板りあつて同好の俳士あつ







情もあぬへくおほ申した犬馬れとの目よりうらたはう願りて  
それ物もをへていゝまをやくたかぶれもあつれ常に思  
りけり字すにひたれ人々の目も心もよくおほえ  
あるるゆきまといさうれあうひめもあふい多しなま俳諧  
の短句はうもほかかしく世にいひまきくる俗談をもて  
はる多はまはすうのちらめも耳たらぬへれ世句合しり小  
えれ小判のあつ繋るもへしこのまじ人あはれまき多田乃  
森り多にねりせをのし聞るまそ琴をあつてもまきわ  
ますへまじや峨々洋々乃音りおいてははいれへれ屋  
えれへはまこ目よりうらた俗談もまきくるまきせし

あつをうしわす侍のまき心乃あつたはわつたぬ處  
屋へちり犬馬のまきこれ屋すれあつは終ていふ乃まき  
に人ありて曰他人屋上のまきまきまきわくにも自己身上の  
風時はいふまきわまきまきまきまきわつたひり乃ま  
まきまき他人の手をまき乃まきまき

畝はまきまき序

山田り水をほりすまきまきまきまき海にも桂新くあつた  
まき畝つらまきと名のまき人あり畝乃柄も汚ぬまきまき  
目もありまき田子乃裾をぬりてまきをいふまきあれ  
風人騒客乃心のまきまきまきまきまきまきまきまき



あゝ〜はまを秋乃田のみもたのり〜花實やみね  
おのひふめたり今の世乃流りハ稲葉の風乃うた〜  
いふも姿のむつ〜きをう〜おのふ和哥ハ又覺らうて  
縁ふやん甲をさ〜あ〜き也ふ〜くひら〜をえぬ  
世〜くも〜る〜と慈鎮和上のみま〜り  
あのは〜り〜又曰〜の文字ふ〜とて此国の  
人ハ哥乃みらをは〜おの〜ハ〜の國〜の  
風俗也〜此撰者もあ〜つ〜困〜乃流行を〜とて其  
境界をた〜と〜心〜撰者ハ三鴨乃麓ふ  
雲蓋戯〜乃数言を題す〜ハ多田乃老圃夏

成美也

書水音集後

じ〜佐國といひ〜人乃りけの花〜あひ〜たり  
あ〜み〜園乃榮榮にあま〜り〜の縁を  
あ〜け〜め〜や松長〜蛙を巻するは〜そのま〜ひ  
あ〜て秋乃さ〜や〜れ声をお〜め〜り冬ふ〜の土ぬ  
こめ〜る〜ひ〜た〜山田に水をさるす〜る〜れ  
あ〜る〜く〜ねをほ〜もい〜に作とたの〜人乃  
あ〜ん〜け〜をほ〜む〜と〜人をおも  
ひて井棠の木もれ〜り〜松長〜の人なる



櫻句帖序

佛よはけり乃をたてまつりて後乃世々々々  
おれ終ふ西上人乃花よりをてつる心終る出羽の國  
大館淨應寺とついにひく木乃橋ありて誰此みほと  
多にふ種をたてはつるおれけん今ひろき國乃中に  
多ふいれくおれ終るふ木ありてかく慈眼よみとあり  
あふれ終へしをれの終らぬをぬ雲をぬつらぬ雲に  
跡はるる多にわひ世堂よりみち終る彌陀乃はひ  
くををてはるの極樂ありしをへし是をうか  
一味乃法雨り淫ひて心あり草木も浄土の縁をむす

あふれ終る人の一句一詠をたてつる花のや  
くあふれ終る色香のよみあふれ終るはるる  
句帖とつよの法よりて人々に筆をゆつる此の  
む交をけしめ書法多し尋風乃許しといひあふれ  
いさ目小えぬさうひるまはと吾も中々花より志心乃あふれ  
ゆ急におひひるりのさく是をたつす極樂も付とめて到ふ  
所ときけはるるをけふ事さうりて千里の外乃す川の  
花の蔭よりてあふれ終る筆をたつる

句帖序

春乃雪窓を折て挿いさひく履をけり杖をひく



下も老懶せんさあくたろ一炉ふぬさ炭城おほく  
吹おうしてひら茶をとりもれもてひねもす茶をすふ  
あまらうた何うの老人られの世捨人なりと膝をたたく  
て終り腹ふらうたのく六盤の奥より入茶具なりとつ  
み川取おて是ハ唐屋の物かまハ誰くの他まる終と  
おしりふりめにつるそ中ひともうりやうを履て茶を  
いふもれ名あまき人の書付ありあまみりものもせれふ  
心うけまて座を替のものとまきまうちゆいあま た  
座をすもらなりとも茶乃湯に用らうとまらひはさ  
るるにせはあまの目さくやいひあまきと利休のまふり

其角の雑談も書おた侍うた人のもとらひひらひの  
或ハ花押をく加へる物をえていふふも故所くた器おれ  
おのまう心にまうけまてみるゆゑはあまのまうまう  
あまらまうゆく座れふや六塵の境界も物なりけこれ真  
空の理をおもひあまきむか誠佛のけりももや侍ま  
もれくくさるももひあまに此まうまもあまじま  
佛のみらあまにうあておひひらまをの事なりうあ  
みまうくらみわらふまう秋田乃一棒々句帖とり  
りのけりまにものまてあまのうた人くくの句をる  
もはまらあまき今の世ふ名たふ他者乃うううへ



句あるはふく支故にあんあゝ名なりおとけき人乃言に  
はるきてたよりしき乃とおりのあゆみしひとにその真よ  
せやして句くの骨髓をよくあらはるおのほくおのりあま  
所いふまはゆらん世物くるものをももをうく屋を筆  
少くして序の心に去付侍る

勝鹿日記の内

そわむつうれ日影くしつづくを願ひては窓の戸  
もあまを上野のくれみしりゆれおのりまをたのひ  
あふれよ書けりゆれり人の入来といふまをやあといふもの  
すうしやあまい交けしあ。白の茶盆をひらびと大あ

かたてを舟中のようしあとかあまれうらさたなつめに  
ゆうはういあおははるくゆりたてちのり一盤  
すじよあらけをたてむし此茶よ今の世乃やうに  
人として何をねえ後鎌倉の旅館のすあわつてを強めて  
ひるやうても起あうまをぬを榮西上人乃濃茶一服あてま  
はるを強ふにああまはく心ゆくあせ強ひし喫茶養生  
記といふまの附とて強ひるあといひつてあめ強まは  
あうをあうあして

竹を見えあ心中あうて春ハゆ

四月一日 花のぬふ山をせもわらあ家の梢よ吹けたま



つて多田の森乃みとて夏にあり申く

不海もくはらへく松の朝を記

金翠吹石蒼波をよみわき人く来りてかのみり  
題をもちち句をよみ松のほく物ほくめははうせめ記し  
あゝかきいひわねふかき餅とよみのの館乃くほきより  
味曾調へあゝかき心ひくあゝいひてわらふ旧國の小豆  
乃く秋のそらちあゝかき形くくきいひて  
海くくくその日乃題

松山乃くぬまにく秋ほくきき

公事くに油くけく過地藏

二日を起て志をくはくひ庭を記かきせありし  
ぬかに物の卒をほくくくをくぬまに秋ほくきき  
耳もやにひくきあゝかきゆめあゝかきにおよひ秋をくく十け  
みそよ終といくもほく庭くくおほきてく心いさ  
はくはくすひくく乃常のちくくあゝかき乃をくくまる  
おとよては記と目ハは免り家あゝかき五来とて書音  
あゝかきくゆくくひくきくあゝかきにくく書はく  
江戸小町をひくかき乃とお海くく去海せあゝかき

五来をおりふ

はくはく乃袂くくくきけつ給







夕ひそめらむあけきたるに秋の風や多らぢめけむ魯  
隠はさみ川に江戸より人ありきみ川舟をもも  
して志ほされし鷹のさわくを足して志きりに古園をおめふ  
心をひかへしれと多目のおのるうちを

すみと河ありしをぬくは雨古鳥

三日 西ふりていそをきししおへりしれとあるをむつり  
きにそ那屋め多くと屋つうと千住とよふ不ようとおゆく  
あつらぬを二本おくとあはれ  
あつらぬの子やあつらぬをみまけを付て  
四月も五月もあめをちきふおつらぬのそ屋記ゆゑに

あつらぬの中ちきふおつらぬを降はきしれむと人のよ

う記るや桶の中ちて五月雨

四山藁卷二終



慶元堂藏板目錄

和泉屋庄次郎

台宗二百題

唐宋八大家讀本

四庫全書總目

兩大師御傳記

神君様并三代將軍様ノ

慶元堂藏板目錄

四庫全書總目 全六冊

清乾隆帝四庫館ヲヒラキ文淵閣書目ナラビニ附存目錄ヲ出スサキニ刻行スル焦氏經籍志等ハ世ニ存セザル書マデヲ附ス頗ル無益ヲ覺フコノ總目ハマノアタリ上古ヨリ清朝マテ傳正存スル所ノ書ノ品目ニシテ學者ノ家ニ關ヘカラザル書ナリ

文化二年 官刻成

唐宋八大家讀本 清沈德潛著 全六冊

韓昌黎 柳柳州 歐陽公 蘇老泉 蘇東坡 蘇頌演 王荊公 曾南豐

方八大家ノ文章ナリ撰者沈德潛ハ乾隆帝ノ翰林學士ニテ俊秀ナル學者ナリニ選文皆純粹ニシテ文人ニ裨益アル書ナリ

文化十一年 官刻成

和泉屋庄次郎

台宗二百題 全十五冊

台宗論題書アマタ有トイヘ古題ニテマワリドウシ此二百題台宗論題ニ益足リ演説ヲミタズ古板不幸ニシテ天明年間祝融ノ災ニカニル然レ氏台家ニヨリ關ヘカラザル書ナルヲ以テ再板成テ舊ノ如ク行ワル

東叡山御藏板

元三 慈眼 兩大師御傳記 全五冊

西大師御高德ハ世人ノ知所ナリ別シテ南光坊慈眼大師ノ御徳ノ廣大ニ華帑ニセカタク御傳記ハ大師御直弟子凌雲院胤海僧正ノ著述ナリ画工土佐家住古具教ナリ恐レオクモ板本ニ神君様并三代將軍様ノ



陸德明經典釋文 考證 全廿冊

コノ書ノ原本ハ影宋本ニシテ清盧文昭考證ヲ為ル其中 本邦物氏ノ七經孟子考文補遺等ノ書並ニ唐宋以上ノ書ニ依テ精微ニ校正ス 本邦へ唯一本舶來セシヲ得テ翻刊ス實ニ經學者ノ文房ニ須史モ無シハアルベカラザル書ナリ此書ノ奇特ナルハ予ガ著ス所ノ經典釋文盛事ニ詳ナリ

九經談 大田錦城先生著 全四冊

今ノ世ニ經義ヲ論セル書數多アリトイヘドコノ書ニマサルハナシ抑々先生英邁ノ大活眼ヲ開キ學問ニ該博ヲ極メ發明スル所アリテツイニコノ書ヲ著ス論ストコロ考據ハ尤ハダ正シクシテ多ク先賢ノイマダ發セザルトコロヲ說破スマコト一四カノ學者ヲシテ耳目ヲ新ニシ經學ノカラタスル書ナリト云

御影像入候書コノ一書ニカキレリ香ヲ薰シ盛ヒ瀝イテ拜覽アルベキ書ナリ 東叡山御蔵板

聖道衣料篇 佐野盛典著 全二冊

上卷ニハ二衣五衣ノ事下袴ノ事天台真言傳法灌頂ニ束帶種々莊嚴ノ支紫甲青甲ノ袈裟ノ支鼻高及草鞋等ノ支 下卷ニハ輪袈裟ノ事金蘭地衲衣袈裟ノ支半裝束數珠ノ支袈裟得名ノ支衣料ニ尺法有事 其外佛家ニカハハリシコトモ委シクカキノセタリ

聖語掇輯 日蓮宗堅樹著 全二冊

大學纂釋 精里古實先生著 全二冊

同諸說辨誤

范石湖詩鈔 周靈蒼 全三冊

陸放翁詩鈔 全四冊

二家ハ南宋詩ノ大家ナリ范詩ハ凄婉工緻悲壯精細ヲ無備シテ唐ノ李青蓮ノ比ナリ然レ青蓮ノ詩ハ奇ニテ逸ナルニ工學ヒガタシ范詩ハ奇ニテ密ナルニ工學ヒマスシ陸詩ハ富瞻ナルヲ万首餘ニ及ビ彈融和雅憤悲ヲ兼ヌ唐ノ白香山ニ比々然レ香山ノ詩ハ總テ權樂ノ意ニテ憤悲ノ詞スタナシ陸ハ忠憤ノ詞多シ是陸ノ勝レル所ナリ二家トモニ詩學ニ大益アル書ナルヲ北山先生ノ序ニ詳ナリ

聯珠詩格 元 全五冊

コノ書ハ唐宋詩ノ格アルモノヲ悉クラセ注解ヲ附タレバ作詩家ノ關ヘカラサル書ナリ一齋先生ノ序ニ此書清朝ニ撰テ幸ニ本邦ニ存スル由ラレタリ

四書集注 道春 全十冊

正徳年間ノ刻本ニテ極テ大字本ナリ 書紙塌木椀 大方君子所求

伊勢物語増選鈔 定家卿注 全一冊

假字考 岡田真澄著 全三冊

芭蕉文集 小林龍山校正 全二冊

隨齋諧話 成美先生著 全二冊

四山稿 成美先生著 全二冊

歸正漫錄 安井真菴先生著 全一冊

宋明名儒教筆ノ佛老ノ害ヲ論セシラ諸書ヨリ涉獵ヲ記出ヌ異端ノ邪路ニ迷フ者ヲ正シキ儒道ニ歸リ入シムルノ書ナリ



聯珠詩格 小本

全二冊

懷中本ニシテカタハラニ押韻平仄ヲ附シテ初學ノモノニ使リス作家ノ活法タルモノ此冊ヨリ善キハナシ

同 譯注

如亭先生著

全一冊

サキニアラハス所ノ詩格小本韻字ト平仄ヲ附トイヘ氏初學ノモノノ解シカタキヲ患ヒテ片カナニテ詩意ヲ委シク解キタルハ初學ノ者トイヘ氏詩意ヨク解テ師家ノ口舌ヲ勞セズト云

宋三大家律詩

老山詩禪 西先生選 一冊

范石湖楊誠齋陸放翁三家ノ全集ノ中ニ律詩ヲ撮アツメ作詩人ヲ三名家對聯手段ノ妙ナルニ學バシムル為ニマ

刀劍或問

肥後松村昌直著

全五冊

此書ハ松村生刀劍ノ鍛鍊ト鑿賞ト

和漢年代廣記大成

全冊

是迄ノ年代記トハ殊ヤフニ一年毎ニ日本ト唐山トヲ合置テ見安カラシメ一紙ニ八十年半紙ニ四十年一行四年ト隔アラニ年ヲ數フルニ甚便利ナリ毎年ノ記事ニ於テハ無益ノ一ヲ省キ大事有益ノ一ヲ大ニ委シク記シタルハ外題ニ廣記大成ノ字ヲ冠ラシメタリ

和漢年統

鏡湖大野先生編

全二冊

此書ハ二頁毎ニ六十年ヲ載セ支干ヲ附和ラ上ニ漢ヲ下ニシ年ヲ數ルニ屈指ヲ持タズ 和ハ六國史ヨリ始メ近世 至ルニ正史及ビ諸家ノ實録ニ因テ正シ漢ハ廿一史ヨリ始メトシテ清三朝實録ニテヲ探リ尚モ有用ノ事ヲ漏カズ汗牛ノ書ヲ約略シテ一卷ノ小冊子トナシ好事家ノ用ニ供ス歴史ノ索引ニシテ典故ヲ探ル捷徑ナル一ノ書ニ過タルハナシト云

野乘

原雙桂著

全一冊

漫筆

雙桂先生ハ一世ノ鴻儒ナリ此編ニ元龜天正ノ頃ノ忠臣勇者ヲ紀スルヲ以テソノ史才アルヲ見漫筆ヲ以博物ノ議論ヲ見増彦教ニ復スル書ヲ以テソノ才ヲ非シ物ヲ詰スルノ卓然識ヲ見先儒ヲ評論スルニ至テハ亦甚深味アリ此書ハ實ニ先世叢談ト併見スヘシ

江戸土産

重長画

三冊

同 續篇

鈴木春信画

三冊

此繪本ハ江戸ノ杜觀及ビ慶々名所ノ風月雪花ニ春夏秋冬景色宜キ地并ニ種々名物ヲテラ罔西且ソノ地ノ物ノ故事線由ヲ備ニ記セリ實ニ諸國ニ行ク者ニ宜シキモノナラヌ江戸ノ人トイヘシヲヒロムルニ足レリ

萬葉集楷落葉

正木千幹大人輯 全五冊

天象地儀神祇教國郡居人倫服食器財草木鳥獸魚蟲ノ類ヲ分チ歌ノヨシアシヲイヘテ此集ニ始テヨミ出タルヲ取テフタビ見ヘタルヲハ省キ或ハ珍ラカナル或ハミヤビタルスベテ古季ノ考證トナルベキ詞トモヲモラサズ拾テ頭ニアゲテ歌ノ作例ヲツバラニエリイテ傍ニ流布ノエリ卷ノツイテモテ何卷何丁ノ表裏ヲ

枝ノ蘊奧ヲ尽シ千古未發復古ノ說ヲ立テ朋友又門人ト多年問答シタル趣ヲ録セシ書ナリ曾テ此技ヲ四方ニ學ビントキコレヲ他人ニ漏ラスニシキヨシヲ鬼神ニ誓テ諸家ノ秘傳ヲ受今其誓約ヲ破テ此書ヲ著シタルモノノ為ニスモシ神罰セハ國家ノタメニ身ヲ以テコレニ當ラント欲ス是コノ書ナルノ基ヒナリ刀劍ヲ好ム人必見ズンバアルベカラズ



サハ委シク記サレタレバ古ヘフリノ歌ヨム  
ク又古シヘマナヒセンニハ片時モ机ヲ  
ハナツベカラザル書ナリ

萬葉集借字對照 采千幹大入輯 全二冊

コハ此集中ニ見ヘタル借字ト真假字ト  
ヲムカハ照シテエリ出サレタレバ本州和名新  
撰字鏡和名類聚ナドニモレタイトノ古ク  
ヨリミハタル文字ノ和訓ヲシルヘキ神國ノ  
寶鑑トヤイフベキナルハイニシヘニ心ヲヨセ  
テ歌ヨミマナヒセンニハ坐右ラサルマシク  
又所謂萬葉ガキナドセンニ誠ニラモシロ  
キツカヒサマノ文字數多見テ世ニタ  
ケヒナキ書ナリ

桂林詩集 三繩準藏先生著 全三冊

雙桂集 原公謫先生著 全三冊

高眠亭錄稿 全四冊

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

精里初二集抄 精里古賀先生著 五冊

同三集文稿 三繩準藏著 五冊

桂林遺稿 三繩準藏著 五冊

千字訓童行 三繩準藏著 全一冊

大清三朝事畧 村山芝場 北条水著 全一冊

唐土名妓傳 清曼翁著 全二冊

明ノ盛ナリシ時游女街ノ事情ヲ書ナラ  
至テ面白ク讀カレテ手ヲ放チカタキ本  
ナレバ無点ニシテ俗語ナル故讀カタシ今ソ  
ノ側ニ片カナヲ以テ和解ヲ添タレハ甚讀  
ヨク分リマスシ無雜作ニイハ通俗ノ晒落  
本ナリ然レバ能學者尤清人ノ著述ナレバ  
根ヲス滑稽ヲ表トシ勸善懲惡ヲ裏トシ  
タリ亦文章尺牘ノタメニヨキ書ナリ

烏石前赤壁賦 楷書大字 一冊

同 後赤壁賦 同 一冊

平林淳信伯夷傳 行書大字 一帖

本草和名 大醫博士深江輔仁著 全二冊 勅撰 法眼多紀安長先生校

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊

神武卷 全一冊

神農本經 大本鈴木賜谷校二冊 小刻

神代卷 全二冊



和漢善行録 一名大和為善録 三冊

和漢古今善行と隱徳ヲ施ス人甚多シ然レモノ姓名詳ナラズ或ハ大部ナル書物ノ中ニテ其名モ事モ世ニアラハレズ人遂ニソノ行ヒラシルモノ少ナシ此書物ハ 日本ハ三代實録文徳實録等ヲ始メ近世ニ至ルニテ唐山ハ明ノ成祖ノ為善陰陽録ヲ基ヒトシ太平御覽事文類聚迪吉録ナドヨリ撰出シタレハ勸善徴忠ノヨキ玉鑑ノ書物ニサレハナシヨツテ國字ガキニテ童蒙女兒ニ見ヤスカラシム覽ル人コレヲカミトシテ習ヒ學ビテ善行隱徳ヲ積ミ施シタレハ上天イカテカ餘慶ノ福ヲ降シ賜ハガラシマト云ル

喬世餘言 全一冊

庭訓往來 尊圓親王筆 全一冊

日光御神忌御法會御衆勤付 一冊

御法會御日割御導師御宮様方御附御手替御府内諸國僧正院家檀林大寺御直末又未并衆徒寺中諸國諸山ノ總代方御列名等クワシクシルス

元三大師百籤和解 一冊

七觀音經 大字兩点付 心經入 一冊

法華宗日鑑 三十番神入 一冊

高祖聖人ヲ初宗門ノ高德名僧諸國諸山ノ開山方等ノコラス記シ日ノ拜礼ニ供フル書ナリ

觀音諸品經 般若心經

七觀音尊影ノ同縁起ノ同神咒ノ音門ノ同觀音經秘鍵ノ千字陀羅尼ノ六觀音真言ノ並不空羂索ノ十大願ノ十句觀音經ノ三十三身御影ノ同和讃ノ同表屬廿八部衆 以上

彙刻書目 清願脩著 全十卷

コノ書ハ清朝ニ現存スル叢書類書等ノ彙刻モノヲクハシクアツタ記タル書也讀書好事家ノ君子一刺モ左右ヲ不可闕書也 文政元年 官刻成

卜子夏易傳 小林龍山校正 全十一卷

瀛圭律髓 元方回字萬里著 全四十九卷

門類四十九二分ツ唐宋ノ律詩ヲ精選シテ書ナリ朱子ヲ尊タル人ナリ自序アリ古今詩ヲ集メテ書汗牛充梁トイヘトモコノ書ニサレハハナシ

同 横切巾箱本 朝川善庵著 全三冊

近聞偶筆 吉田篁墩著 全四卷

西銘 全一冊

閱藏智津 明滿益智旭著 全四十八冊

淨名經三觀玄義 天台大師著 全三冊

請觀音經疏會本 天台大師著 全一冊

像法決疑經記會本 沙門本純著 全一冊

例時懺法 淨名律院菩薩 比久聖寶校正 全一帙

法華懺法 全一帙

三陀羅尼 右五種東嶽嶺板 全一冊

天台四教儀 高麗沙門諦觀錄 全一冊

佛道手引草 大賢和尚著 全三冊

觀世音御和讃 全一卷



墨子全書 近刻

全十五卷

萬民德用

鈴木正三著

全一冊

世間流布ノ本、誤字脱文等多有之、杜撰ニシテ取ニタラス、今刻スル本、清朝ノ畢阮カ經訓堂叢書中ニ納ムルトコロノ本ヲ真面目ニ翻刻シ、點校ヲ善慮先生ニヨイ、稀世ノ善本トスセ、公ヌルノ日四方ノ諸君子ニ套ヲ求テ予言不妄ヲ見ス

舊注蒙求

龜田鵬齋著

全三冊

二人比久尼

鈴木正三著

全一冊

正三老人行脚ノ後、三河石平山ニ居シ、生ヲ利スルヲ年又シ、未後ニ慶安戊子ノ夏、關東江城ニ至テ、諸人ヲ濟渡ス、大悟道ト人ナリ

大學私衡

同

全一冊

衣裏寶珠書

中山元政上人著

全一冊

黍稷稻粱辨

同

全一冊

法華初成佛抄

沙門日華著

全一冊

善身堂一家言

同

全三冊

學古編

全一冊

古今文評

王道光著

全一冊

念三千等御書

日遠上人御文

全一冊

先哲叢談

原念齋先生著

全四冊

此書ハ文祿慶長ノ際ヨリ享保元文ノ頃ニ至ル迄名聲籍甚ノ碩儒聞人ノ列傳ニシテ其姓名字号俗稱生誕没故ノ年月日一テ洩サズ能ルシ、撰史、節記及ヒ口碑ニ存スル言行ノ奇談ヲ悉ク採摭メ古人ニ面接シテ往事ヲ見ルガ如クナラシム其言行篤實アリ博覽アリ抗辯アリ矯後アリ執拗アリ介僻アリ可貴可感可喜可驚可哀可嘆ノ佳話甚多シ故ニ看官大ニトル時ハ脩身齊家ノ模範トナスヘク小クトル時ハ温故知新ノ談柄トナシテ固陋實聞ノ誘ヲ免ルニ術此書ニヨラズシテ又何カアラム研尋ノ君子一度卷ヲ開カハ終日手ヲ離シ事ヲ得サルホトオモヒロキ書ナリ

瓶花庵詩集 附瓶話

全一冊

時代 模画

俳家奇人談

蓬庵青山人著 蕙齋紹真臨圖

全一冊

此書ハ往古宗祇宗鑑守武貞徳ヲ初中古芭蕉其角嵐雪園女千代等共外高名ノ俳客ハ一有餘人贈答ノ發句金玉絶妙或ハ奇事生卒等ヲ筆面白キ風流ノ叢話ナリ卷中ノ画圖ハ守武ノ肖像貞徳書齋因自室芳野山花見ノ園芭蕉翁浪華花屋寄宿ノ園并翁頭陀箱傳來乙由戲場見物ノ圖又古人名家ノ真蹟短冊并画賛点印点式等数多何レモ其模写ス是皆世ニ稀ナル秘蔵ナリ且當時三都ハ云ニ及ハズ諸国名家ノ跋句ヲ卷末ニ附録ス素ヨリ詩歌連俳一鉢ニシテ古今縉紳家ニモ誦セラルナレハ詩歌連俳ニオイテノ名家ノ奇談小説多ク編集セリ爰ヲ以テ俳家ノミニモ限ラズ風雅好事ノ君子坐右ノ貯ヘタマヘ古今風流变化ノ趣ヲ知り



聲畫集

宋蔡贊仲著

全四冊

此書題画モノニシテ諸君子ニ有益ノ書ナリ  
文化十四年成官刻

揚子方言

漢揚雄著

全三冊

疊字法帖

尊朝親王筆  
行書中字

全二冊

本朝名公墨寶

全三冊

彙刻書目外集

全六冊

此書古今船來スルモノノ彙刻物ヲ予カ  
目撃スルコトニ数年書集ヲキタルコトナレ  
渡來スル彙刻書目ニ照重出ヲ刪リ脱スル  
書ヲ載セ外集ト題シテ梓ニチリバ  
子ノ高覽ニ備ト云爾

慶元主人自題

參考伊勢物語

展輪池先生著 全三卷

世ニ註釋數十家有テモ皆定家卿校本初葉本偶有誤  
校正ノ爲メ舊本ヨリ東嶽院入道尊徳卿本ニ行本ニ參考ス精  
本出定家先生考卷ノ附ハ本三ニトモ父難義ハ正所天解ト安也

且書画鑒定ノ一助ニモナルニシテ方今文  
人盛ニシテ諸家ノ著述新撰日ニ月  
ニ多クシテ書肆コレガ爲ニ彫刻ニ  
雖此各ニオイトハ固書關典ニシテ未  
曾テアラザル新書ナレハ此度速ニ刻  
テ都邑風流君子ノ尊覽ヲ希フ所ニ

長崎先民傳

嵯陽盧嶺撰  
皇都廣念齋校

全一冊

此書和漢ノ諸名家崎陽ニ遊客タリテ畫驥  
先生聚類別部テ十三門トシテ姓名字号俗  
稱ヲタシ言行ノ奇談事蹟ヲアサシメルニ  
レ博覽ノタスソトナルヘクシテ佳話甚多  
コトニ名高キ文人ノ著作ナレバ初学文法ノ助  
トモナルベキ本也

別部如左

學術	談天	隱逸
貞烈	處士	技藝
醫術	通譯	忠孝
流寓	善著	任俠
		緇林

鶯村畫譜抱一先生  
曾中山鵬齋先生  
高山樓画筆文晁先生

全一冊  
全一冊  
全一冊

此畫譜ハ當今天下ノ人瞻仰スル所ノ大家各泊内筆ヲ鑲刻シテ画則ヲ學ブ先生親筆  
ニシテ直ニ其堂ニ升リ其室ニ入ル階級トス其蒐羅スル所昂然タル人物悠焉名山水香漢ノ飛  
翕山野ノ走獸草花艶麗尤樹木ノ鬱蔥タル藻二隱ル鱗介土ニ蠢ク蟲多ニ至ル迄宇宙  
間ニ在ル所ノ品類トシテ備ラズト云フナク水墨ノ濃淡ヲ交ヘ着色ノ疎密ヲ示ス丁字  
親切今時現存ノ衆画譜ノ倫ニ非ズ往昔ヨリ舶來ノ畫軸多シトイヘ此画譜一度出テ  
徽宗ノ鷹風逸ノ東坡竹雪ニ折ルト云ベシ其流麗清新寔ニ仰ベク貴ムベシサレバ三家  
各其意匠異ナリトイヘ凡ソ約スル所神韻ノ高キ興致ノ深キ殆一世ノ風靡スルニ足ル見人當  
ニ其目ヲ悅バシムル而已ナラズ未ダ見ザル地ニ到リ未ダ見ザル物ヲ弄スカ如ク博覽  
多識ノ資トモナリテ性情ヲ養ヒ視聽ヲ博ルルノ術此画譜一部ニ盡セリ凡ソ賜願ノ君  
子試ニ一裘ヲ閱シテ我言ノ妄ナラザルヲ知給ヘ



文化百人一首 酒井先生筆 踏齋北馬画 全二冊

同 女今川入

女今川 女手習教訓状入 酒井先生筆 一冊

實語教 頭書入 一冊

隅田川往来 酒井先生筆 一冊

増補塵却記 全二冊

日用算法記 一收摺

萬寶年代記 一收摺

手傳の教 野呂惠先生著 全二卷  
要語歌 同 全一卷

繪本武者大全 全二冊

將門一代記  
八幡太郎一代記  
田村將軍一代記  
朝比奈一代記

職官志 蒲生伊三郎著 全七卷

淡海公ノ令義解及ニ集解六國史扶桑  
記日本紀畧類聚國史職原抄官職秘抄  
等ニ依リ唐ノ李林甫カ六典等ヲ以テ  
皇國ノ職官ヲ參考ス職官ヲ明クシテ  
スル者座右ニ置マシアルベカラザル書也

文會業餘 松澤老泉著 全四卷

古今藏書家ノ印記措紳諸侯方藏板ノ  
書目唐山ノ官板ヲ 我國ノ書肆翻刻セシ  
皇國ノ官板ト混カシテ正ニ通行本異板ノ書  
目活板翻刻ノ書目非破主客ノ問答ノ書  
我國五六百年以前大藏經ノ板有ニ考ヘ 我朝  
古代武家或寺社等ニ印刻シ書目其外書皆  
掛ル奇談等ヲ集ル書也



